

お宮参りに見る古代イスラエルの影響

✦ 文 岩本耕太郎 text by Kotaro Iwamoto ✦

子供が生まれて1カ月くらいではじめて神社にお参りする「お宮参り」のお話です。これは生まれた土地の産土神に赤ちゃんが無事に誕生したことを報告する風習です。古くは産土詣を起源とし、室町時代頃にお宮参りと呼ばれるようになったそうです。それぞれの土地で少し慣習は違いますが、ほぼ一致していることは赤ちゃんを抱くのは出産した母親ではないということとです。私自身の孫のお宮参りの際にも、私の妻すなわち父方の祖母が赤ちゃんを抱いてお参りました。

これは「穢れ」という考えに基づいているそうです。昔は出血を伴うお産が穢れとして忌まれていたことから、「穢れのある母親が、お宮参りで赤ちゃんを抱っこするべきではない」と考えられていました。そのため、伝統的なしきたりでは「父方の祖母」が赤ちゃんを抱っこするのだそうです。そこで神官は赤ん坊を清めるために、榊の枝でお祓いをします。こ

のことは世界ではあまり聞かない風習で、日本独自のものではないかと思っていました。ユダヤ教のラビ（指導者）であるトケイヤー氏はこの風景を見て古代ユダヤの風習と全く同じだと書いています。

ユダヤには同じように「産後の穢れ」という考えがあり、赤ちゃんの初宮詣のときには、やはり母親以外のものが赤ちゃんを抱くのだそうです。そして榊の枝でお祓いをする仕事もそっくりらしいのです。特筆すべきは神官が着ている白装束の袖の先に付いている房です。日本人でこの房の意味するところを知っている人はまずいません。実はこれこそ非常に古いイスラエルの風習で、聖書にも「身にまとう着物に房をつけなければならぬ」（申命記）とされており、衣につける房はイスラエル人であることのトレードマークであったそうです。

日本人がその理由を忘れてしまっているながら、今も当たり前のように

受け入れている習慣の大本が古代イスラエルであることを知ることは、世界における日本人の立ち位置を考える一助になると思います。



profile

帝国クリニック院長

1959年生まれ。幼少期をボストンで過ごす。

山形大学医学部卒。米国イリノイ州立大学で分子生物学を研究、1993年より現職。

サーフィンとクラシックカーをこよなく愛し、4世代7人家族。

著書に『患者さまが増える』（H&I出版）、『エグゼクティブが実践するたった一つの健康法』（中経出版）